

求心
ワタケが
あまる!?
だれなの!?

♥ ナゾの四兄弟と薬指の約束 ♥

みゆ / 著

ほんだ
本田ロアロ / イラスト

ときどきけいぶんきょうだい
 ♥ 時任家の四兄弟 ♥



ツンデレイケメン♥

かい
 次男 戒 (中2)

めつきが鋭くてちょっと怖
 い……けど、実は面倒見が
 いい♥



優しいお兄さん♥

さつき
 長男 皐月 (高2)

おとな大人っぽくて優しい♥
 淹れてくれる紅茶は絶品!



ミステリアス美少年♥

ちはや
 三男 千早 (中1)

ものしず物静かで、ちょっと不思議
 系。たまに見せる意外な表
 情にキュン♥



かわいすぎる末っ子♥

ひすい
 四男 翡翠 (小6)

いつも元気! 甘えん坊で無
 邪気な笑顔を向けてくれる♥






白石美月(中1)

両親の海外転勤をきっかけに、時任家に居候
することになった女の子。
何事にも前向きに取り組むタイプ。子どもの
頃から習っている日舞で名取になるのが夢。

— 目次 —

1	<small>ほし ふ よる</small> 星の降る夜	006
2	<small>つき よ あおいろ</small> 月夜と青色ハーブティー	012
3	<small>やかた あるじ</small> 館の主	020
4	<small>とき どう け よんきょうだい</small> 時任家の四兄弟	027
5	<small>ご ぜんさん じ ちゃ かい</small> 午前三時のお茶会	035
6	<small>よる</small> 夜	040
7	<small>てん こうしょ にち</small> 転校初日!	056
8	まっさかさま	064
9	<small>ふ し ぎ よる め ざ あさ</small> 不思議の夜と目覚めた朝	072
10	<small>ち か しつ</small> 地下室	078
11	<small>とき どう け ひ みつ</small> 時任家の秘密	093
12	<small>きゅうけつ き こん やく しゃ</small> 吸血鬼の婚約者	102
13	<small>くろ いし け とき どう け</small> 黒石家と時任家	115
14	<small>わたし か あいて</small> 私を噛んだ相手は……?	131
15	<small>くすりゆび</small> 薬指	141
16	<small>ご さん け はなし</small> 御三家の話	150
17	<small>きゅうけつ き はなよめ</small> 吸血鬼の花嫁	157



かれし
彼氏にするなら、飛ぶような気持ちにさせてくれる人がいい。

そら
空も飛べる、気分がふわふわする、そんな楽しい人がいい。

つき
月も夜空も都市も飛び越えて、一緒にいられる彼がいい。

わたし
私の心を浮かばせて、笑い合える人がいたらいい。

わたし
どこかに、私と一緒に飛べる人はいないかな。



1

星の降る夜

「こんばんは」

星をひっくり返したような夜だった。

キラキラはちばち、夜空には星が瞬いている。

私の目の前には、古い洋館が建っていた。

その館を守るように立ちはたかる頑丈そうな門は、まるで私を拒んでいるように思える。

風がびゅうと吹いて、制服のスカートがひらりと揺れた。

季節は五月だけど、夜はまだ少し冷える。

「寒いなあ……って、ひえっ!？」

ギイツと、三メートルくらいの高さがある鉄門が、突然開き始めた。

薔薇の装飾がほどこされた門は、どことなくツンとして冷たく見えたけど、私はおそるおそる

踏み出した。



だって、私……白石美月は、今日からここに住むのだから。

「自動ドアなのかなあ。それが、風とか……」

門がひとりでに開くなんて、そんなことあるはずないよね。

私、すっごく怖がりなんだ。

お化け屋敷もダメだし、ホラー映画なんてもちろん無理だ。

夜に心霊番組を見た後とか、ひとりでトイレに行くのが怖すぎて、ママについて来てもらうくらい臆病なの。

「でも、すっごく古そうな建物だなあ。それに、お城みたいに大きいー」

白薔薇のアーチをくぐり、洋館へとまっすぐ続く石畳の道を、おっかなびっくり歩き出す。夜ということもあって、古い洋館がおどろおどろしく見えて少しだけ怖い。

「ううー……!」

手を胸にぎゅっと当て、小走りでなんとか洋館の前まで辿り着く。

その時だった。

「君、誰?」

「へ?」



空から、声が降ってきた。

その声は耳に心地よく、のんびりした甘くて低い声だった。

思わず見上げると、空には逆さまになった男の子がいたんだ。

「!?」

長い足を天空に向け、視線は地上にいる私に向けられていた。

う、浮いてる!?

人間って浮けたっけ?

ええっ!? そんなことある?

パニックになっていると、これが普通のことみたいに、男の子が再び話しかけてきた。

「ねえ」

逆さまのままゆっくりと、男の子は私の方へ降りてきた。

お互い逆さまのまま、視線が合う。

その瞳の色は真っ赤で、ルビーのように透明で澄んでいた。

髪は夜風にさらりと揺れている。

鼻筋が通ったつんとした高い鼻に、白磁のような透明感のある肌。

逆さまでもわかる。なんて綺麗な男の子なんだろう。

うん！ こんなイケメンに今まで生きてきた十二年間で出会ったことないし、なにより、人が浮くなんてありえない。

決定しました。これは、夢だね！

「うちの、客？」

「っ！」

飛行少年はくるりと宙返りして着地すると、私に顔を思い切り近づけてきた。

いやいやいやいや、イケメンすぎてまぶしいっ!!

しかもこんな至近距離！ あと数ミリでキスしちゃう距離ですけどもっ!?

「きゃあああああー！」

夢の中とはいえ、私は思い切り叫んでしまった。

それから、視界が歪んでそのまま真っ暗になった。

次に目を覚ましたら、きつとベッドの上だろう。

あんな理想のイケメンの夢を見られるなんて、今夜はラッキーだなあ。

けど、夢の中のイケメンが、最後に放った言葉が心に残る。

あの言葉って、どういう意味だったんだろう？

「今すぐ、帰れ」

なんて。



2

月夜と青色ハーブティー

「……んん」

なんだか、いい香りがする。

花のような蜂蜜のような、甘くて品のいい香りが私を眠りから目覚めさせた。ゆっくりと目を開けると、ふかふかなベッドの上にあった。

ただし、見慣れた自分のベッドではなかった。

「……あれ？」

異変に気づき、慌ててガバリと起き上がる。

「目が覚めた？」

穏やかに艶やかに、落ち着いた声の持ち主が、心配そうに私に声をかける。

長身の男性がベッドの脇にひざまずいて私と視線を合わせてくれた。

切れ長の目に、繊細で美しい端正な顔立ちにドキッとしてしまう。

私より四、五歳くらい年上かなあ？

ミルクティーみたいな色をした柔らかそうな長い髪を、ゆるくひとつに束ねているのが大人っぽくて余計にドキドキしてしまう。

それに、黒い洋服の上から、ゆったりと羽織っている白を基調とした着物が、彼のやわらかな雰囲気にとても似合っていた。

なんて言うか、ものすごく綺麗な人なんだけど、癒やし系で話しやすそうな人だ。

「わ、私……」

「玄関先で倒れてたんだよ。体調は大丈夫？」

どこか怪我してたり痛いところはない？」

「あの！ 男の子が！ 空から！ 降ってきてですね！」

「あはは。君、面白いね。夢でも見たのかな？」

「……夢……」



不思議な夢だった。空に浮いた男の子の夢。

あんな夢、初めて見た。

「……そうですね。人が浮くなんて、ありえないですよね」

その人は、小首を傾げ、ミステリアスな微笑みを浮かべてこう言った。

「そうだよ。人が浮くなんて、ありえないよ」

色素の薄い綺麗な瞳が、一瞬、青色に揺らめいたように見えた。

「君が元氣そうでよかった。その様子なら、大丈夫みたいだね」

「あ……は、はい！」

「僕は時任皐月。この家——時任家の長男だよ」

「時任、さん……」

「ふふ。僕には三人の弟たちがいるし、ここでは家族全員が『時任』だから、僕のことは気軽に下の名前で呼んでね」

「は、はい。じゃあ、皐月、さん……?」

「うん」

皐月さんが、ふわりと優しく微笑んだ。

「私は、白石美月です。今日からここでお世話になる予定です……」

「美月ちゃんだね。父さんから聞いているよ。君の荷物は昼間届いて、もう運び入れてあるから安心して」

「あ、ありがとうございます」

話を通していたことにほっとしながら、ペコりと頭を下げる。

「長旅お疲れ様。今、お茶を淹れるから、ちょっと待っていてね」

皐月さんは立ち上がると、ベッドサイドのテーブルに準備されたティーセットに手を伸ばした。

透明な硝子の茶器を使って、皐月さんが長く白い指でお茶を用意してくれる様子を、ぼんやり

ながめていた。

イケメンって、なにをしてもカッコいいんだなあ。

というか、皐月さんってなんだか大人っぽい。

身長も百八センチはありそうだし、大学生くらいなのかも。

「あの、皐月さんっていくつなんですか？」

「十七歳。高校二年だよ」

「えっ!? 大学生かと思ってました」

「それ、よく言われる」

皐月さんはクスリと品のある笑みを浮かべると、テーブルに淹れたてのお茶を置いてくれた。硝子のティーカップに入っているお茶は青色で、不思議に揺らめいていた。

「わあ！ 青色のお茶なんて初めて見ました。綺麗……」

「僕が茶葉をブレンドしたんだ。バタフライピーっていう、綺麗な青色の花弁を混ぜているんだよ。心を落ち着かせる作用があるから、よかつたら飲んでみて」

「はー」

ベッドに腰掛けて、ティーカップに口をつける。

あ、おいしいー！

花のようないい香りのするお茶は、ほんのり甘くて宝石を溶かしたような味がした。

「こんなにおいしいお茶を飲んだの、私、初めてです」

「本当に？ 嬉しいな」

皐月さんは照れたようににはにかんだ。

その顔は少しだけあとけなく見えて、やっぱり高校生なんだなと思えた。

「今日はご両親をお見送りしてきたんだよね？ お昼はちゃんと食べれた？」

「はい、空港のレストランでパパとママと食べました」

そうなんだ。

今日から私の両親は仕事の都合で、ニューヨークに行ってしまったの。

私は、習っている日本舞踊の名取が取りたくて、日本に残ったんだ。

日舞で名取になると、稽古をつけてもらっている一門の名前を名乗ることができる。

私がつつと通っているのは、花風流。名取になれば、私は先生から別の名前をもらえるようになるんだよ。

私の、小さい頃からの夢なんだ。

三歳から習い始め、中学生の間に名取になるって目標をずっと前から決めていた。そうして長年稽古をつけてくれていた先生から、名取になる試験に向けて特別な舞を習おうとしていた矢先に、パパの海外転勤が決まってしまったんだ。

しかも、日本に戻ってくるのは何年先になるかわからないって。

夢を叶えるために日本に残るか、パパとママと一緒に海外に行くか……。

悩んだ末、私はパパとママに「どうしても日本に残りたい」と真剣に話して、なんとか説得することに成功したんだ。でも、広い家に私ひとりだけで住むわけにはいかない。

私はまた中学一年生だし、ひとり暮らしなんてしたことがない。パパもママも親戚は遠いところにいるし、頼れるあてもない。

さてどうしようかと困っていた時、助けが現れたんだ。

それが、パパの親友の時任隼人さんだ。

昔からの友人らしいんだけど、私は会ったことがないんだ。

「今から夕食なんだけど、そこでうちの家族を紹介……」

く——。

(うそおおおおおおおっ!?)

隼人さんの話を聞いている途中で、私のお腹が鳴ってしまった。

嘘嘘嘘嘘っ!?

てか、こんな綺麗なイケメンの前でお腹が鳴るとか、恥ずかしすぎるー!!

「きゃ——!」

「あはは。お腹空いてたんだね。仕方ないよ。もう、十一時をすぎたから」

隼人さんの言葉に、壁にかけてあった古そうな振り子時計の文字盤を見る。

私がこの家に着いた時は夜の七時くらいだったはずだ。

「わ、私わたし、どのくらい寝ねてましたか!?

「そうだなあ、四時間よじかんくらいかな?」

「よじかん?!」

そんなに寝ねてたんだ。

そりゃあ、お腹なかも鳴なるよね……。

でも、こんな真夜中まよなかに夕食ゆしゆっていうのも不思議ふしぎだ。

もしかして、私わたしが起きるのを待まっててくれたんだろうか?

なら、すごく申し訳わけない。

「ダイニングに行いこうか」

「……………はい」

「ぶふ」

皐月きつきさんは私わたしの頭あたまをよしよしとなでると、まるでお姫様ひめさまを扱あつかうように手てを取とってくれた。

「ごっちだよ」

ギイと開あけられた廊下ろうかの向むこうは漆黒しつこくで、まるで夜よるの闇やみが入はいり込こんできたみたいだった。



3

館の主やかた あるじ

「そうだ。夕食の前に、父さんに挨拶をしないとね」

長い長い廊下を歩く。

こんなに長いと、永遠に続きそうな感覚がしてしまふ。

明かりがないせいで、足元が心許ない。

皐月さんが手を繋いでくれていなかったら、転んでしまいそうた。

こんな綺麗な人と手を繋ぐなんて、普段なら緊張して無理だけど、今は暗すぎてそんなことも言ってもらえない。

「僕の父さんと君のお父さんは、古くからの友人みたいだね」

パパは仕事柄、日本のあちこちに友人がいるらしくて、家にお客さんを招くこともたびたびあった。

でも、時任さんっていう人には会ったこともなければ、パパから名前を聞いたこともなかった

から、今回の話には私もママもビックリしたんだよね。

友人の娘とはいえ、直接会ったことのない私なんかを、両親が日本に戻るまで面倒を見てくれるなんて、そんなことある？

パパは「時任さんは、とてもいい人だから安心しなさい」って言ってたけど、やっぱり、なんだか変な気がする。夢を諦めないで済んだことには、感謝してるけど。

皐月さんがふいに立ち止まり、そっと私の手を放す。

「はいだよ」

それは、とても古い扉のように見えた。

コンコンと、ノックをする。

「どうぞ、入って」

扉の奥から、少年と大人の真ん中くらいの声が聞こえてきた。

そんなわけがないのに、なぜか、昔から知っているような——どこか親しみやすいその声に、緊

張が少しだけ解れた。

ギイと内側から開かれたが、ドアの前には誰もいなかった。

どういう仕掛けなんだろう？

「こんばんは」

皐月さんのあとを追い、そろりと部屋に入る。

真つ暗闇の中、誰かの気配を感じた。

目が慣れた頃、カーテン、家具、それから蝋燭の灯りが踊るように次々と灯り出した。

きつと、そういう照明なんだと思う。

デパートの素敵なインテリアショップで、似たような電化製品をママと見たことがあるから。

本物の炎に見えるけど、実は偽物で、蝋燭の根本には電池が入ってるんだ。じゃなきゃ、こん

な不思議な灯り、説明がつかないもん。

「い、こんばんは……」

皐月さんの弟なのかな？

高校生？ 中学生？

それくらいの年齢に見える、綺麗な男の子だった。

ぼんやりと揺らめく照明の下、笑顔で私を迎えてくれる。

「ちゅいす」

でも、この部屋って皐月さんのお父さんの部屋なんだよね？

なにがなんだかわからず、臯月さんを見上げると、ニコツと微笑むだけだった。

「えっと……」

薄暗くてよくわからないけれど、金色の髪は染めているのかな。目も少し青い気がする。ゆらりと照らす照明の灯が、私にそう見せるのかもしれないけど。

「美月ちゃん」

「はい」

名前を呼ばれたから、反射的に答えてしまっ

た。

彼の背後にふわりと広がるカーテンは、夜空の色をしている。

「初めまして。時任家主の隼人です」

「隼人、さん。初めまして、白石美月です」

見上げた彼は美しく、暗闇の中でも眩しかった。

「臯月、美月ちゃんを連れてきてくれてありが



とう。また、夕食の時にね」

「はい、父さん」

隼人さんの言葉に、皐月さんは頷くと、私を残して部屋を出ていってしまった。

父さん？

だって、隼人さんって皐月さんより年下だよな？

一体、どういうこと？

「美月ちゃん、改めてよろしくね」

「よ、よろしくお願ひしますー」

金髪の美少年、隼人さんは、私に近づくと優しく笑いかけてくれた。

背は、私より少し高いくらいだ。

お父さん、なんて呼び方、やっぱりおかしな気がする。

「あの、お父さんって……」

「ん？」

「皐月さんが、隼人さんのことをお父さんって呼んでたので……」

「うん。皐月は僕の息子だよ」

「ええっ!？」

「二〇二〇と当然のように、隼さんが頷く。

「あはは。僕、若く見られることが多いんだよね」

照れたように隼さんがはにかんだ。

「いやいやいやいや、若すぎるにもほどがあるでしょー」

たしかに、黒いスーツは着てるけど、中学生がおめかししてるようにしか見えない。

「君のパパとは親友みたいなものだから、僕にとって美月ちゃんも同然だよ」

「は、はあ」

「だから、自分の家だと思って、ゆっくり過ごしてくれたら嬉しいな。いつまでもいてくれてい

いからねー」

「……」

嬉しい申し出だけど、同級生のように可愛い見た目の男の子に言われても、困惑してしまう。

「うちは息子しかいないから、娘ができたみたいで嬉しいな」

戸惑う私をよそに、隼さんが私の両手を握ってきた。

その手は氷のように冷たく、少し驚いてしまった。

この部屋、少しひんやりしてるけど、それでもこんなに指先が冷たくなることなんて、あるかな？

手が冷たい人って心が温かいって言うよね。

「美月ちゃんに、僕の子どもたちを紹介するね。食事に行こう」

「は、はい！ よろしくお願ひします！」

隼人さんの見た目の若さにはビックリしたけど、これからお世話になるんだ。

ちゃんと挨拶しなきゃ！



4

時任家の四兄弟

「今日からお世話になります！ 白石美月です」

ぺこりと頭を下げた私の前には、とんでもないイケメンたちが長テーブルを囲んでいた。

ここはなんなの？ アイドルの事務所なの？

皐月さんも隼人さんも美形だったけど、まさかこの家の他の住人も全員イケメンだったなんて！

このレベルのイケメンに複数同時に出会えるなんて、そんなことある？

平凡な私がいっている場所じゃないことだけはわかる。

てか、場違いすぎる。

ひええ、このまま顔を上げたくない。

なんでこんなところ？

今朝まで、平凡な生活を送る、普通の女子中学生だったのに。

「ふーん」

「……………」

誰かの冷たい視線と、不機嫌そうな声が聞こえて、ピクリとする。

「美月ちゃん、顔を上げて」

「ほら、みんな自己紹介してね」

皐月さんと隼人さんの優しい声に励まされ、おそろおそろ顔を上げる。

一番手前の椅子に座っている吊り目の男の子が、頬杖をつき私を見ていた。

黒い髪はライトに照らされると、赤色にきらめいている。

いやいや。いやいやいやいや。

カッコいいけど、視線が怖すぎる。

けど、なんだかこの目つき、見覚えがある気がするんだよね。

「戒」

「……次男の時任戒。十四」

少少だけ厳しくなった隼人さんの声色を聞いて、渋々といった感じで、戒くんが口を開いた。

目つきが鋭くて怖いよー！

戒くんは、そのままふいっと視線を逸らすと、グラスに注がれた透明な液体を飲み干した。

「……………」

「千早。ぼうっとしてないで、美月ちゃんに挨拶しなさい」

銀髪の男の子が、窓辺に一番近い席にもたれるようにして、ほんやりと月を見上げていた。

私のことなんか、ひとつも興味ないって感じ。

窓から差し込む月明かりのせい、銀色の長いまつ毛に縁取られた瞳が、海みたいに青くきら

りと揺らめいた。

それが、とても綺麗だと思った。

ん？ この人も、どこかで会ったような…………？

「三男。時任千早……………」

「千早は、美月ちゃんと同じ年なんだよ」

「そうなんだ、よろしくね！ 千早くん」

「……………」

頑張って明るく話を振ってみたけれど、千早くんは最後までこちらを見ることはなかった。

な、なんなの〜！

「わあ！ 美月ちゃんって言うんだね。今日からよろしくね」

「え……」

自分より顔が綺麗な男の子たちに冷たくあしらわれ続け、そろそろ私の心は折れそうだ。



私の目の前に駆け寄ってきたのは、ふわふわのオレンジ色の髪をした、とても可愛い男の子だった。

腕には、白うさぎのぬいぐるみを抱えている。

「ぼくは、末っ子の時任翡翠だよ」

「翡翠くん？」

「うん！」

名前を呼ぶとニコッと微笑んでくれた翡翠くんに、胸が高鳴る。

天使すぎる。

「翡翠くんは何歳？」

「ぼくは十二歳、小六だよ」

「そっかー」

頭をなでなでしたくなるくらい、翡翠くんは素直で可愛かった。

私はひとりっ子だから、弟がいたらこんな感じなのかもしれない。

「僕たち兄弟は、小中高一貫の同じ学園に通っているんだ。美月ちゃんの転校先だから、なにか

あったら僕らを頼ってね」